

# Medical



## この数年、医療界で 注目を集める“性差医療” 私たちにどう関係するの？

### ナビゲーター



医療ジャーナリスト・写真家  
**伊藤隼也さん**

いとう・しゅんや　国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材。「とくダキ！」（フジテレビ系）でメディカルアドバイザーを務めるほか、多数のメディアを通じ、患者目線の情報を発信。05年には『福井県民が選ぶ医療ジャーナリズム賞』大賞を受賞。

### Column

#### 意外と知らない新事実/ 女性がなりやすい症状を Pick up!

##### 冷え性

季節や体温の高さに関係なく、体の一部分や全体が冷えて不快感を感じる症状のこと。ナマ暖や薄着などのせいかと思いや、根本的な原因は筋肉不足。女性はヤギ型、ばっかり型などの体型にかかわらず、エネルギーを熱に変える筋肉が少ない人が多く、男性よりもどうしても体が冷えやすい。温かい飲み物や厚着をする対症療法よりも、軽めのダンベルなどを使った筋トレが効果的！

##### 下肢静脈瘤

下肢(脚)の静脈血の逆流を防ぐ「弁」がうまく機能しなくなることで血液がたまってしまう病気。コブがボコボコ浮き出るイメージだが、実はコブのない「隠れ下肢静脈瘤」もあり、もともとふくらはぎの筋肉へひく筋の働きが強い女性が多い。ハイヒールばかりを履くという生活習慣でも悪化し、そけい筋が圧迫されやすい妊娠中も要注意。ふくらはぎの筋肉を意識的に動かす心がけを。

詳しくはこちら!  
**「オナナの病気  
新常識」**  
(講談社・¥1,575)

「性差」に注目し、女性特有の病気やかかりやすい病気を専門医に徹底取材。今まで知らなかった新常識が満載。男性版も発売中。

### 男性のデータで女性を 診察する医療の現実

突然ですが、医療界で注目されている「性差医療」という言葉を知っていますか？ 性差医療、とは、80年代にアメリカで考案され、90年代に広まった、男性と女性で異なる医療が必要だという考え方です。これまで男女は、生殖器以外は生物学的にほとんど差がないと考えられていました。現に、今行われている一般的な診療での投薬などは、ほぼ男性のデータを基準にしていて、量を体重差で加減しているだけ。女性は月経周期な

ど女性ホルモンの変動に伴って体温や体調が変化し、安定した研究がしづらいという背景があり、仕方がない面もあります。

ところが、医学の進歩によって、同じ病気でも男女で症状が異なる場合があったり、根本的にかかりやすい病気が違うなど、性別による差が明らかに。男性と女性では遺伝子をはじめ、骨格や筋肉量も違えば、分泌されるホルモンも完全不同。そのため、性別によつて異なる医療を受けることが求められるようになったのです。

外は生物学的にほとんど差がないと考えられていました。現に、今行われている一般的な診療での投薬などは、ほぼ男性のデータを基準にしていて、量を体重差で加減しているだけ。女性は月経周期な

女性は生物学的にとても強い生きもの」とても強い生きもの

たとえば頭痛では、女性は頭の片側がズキンズキンと痛む「片頭痛」が多く、男性は日の奥がえぐられるように激しく痛む「偏頭痛」が多い。心筋梗塞の発症率でいえば、女性は男性の1/2から1/3、性別による多くの違いがわかることがあります。

日本の医療はこれまで、内科や外科など、それぞれの分野に特化した専門性が、高く評価されてきました。そのため、大学病院はじめ、診療がすべて専門別に分离することが肝心です。

日本では、女性の病気に対する専門性が高まってきた上で男女の最も大きな違いは、女性ホルモンの存在です。開封までの間は、女性ホルモンが活性化に分泌され、動脈硬化や血圧の上昇などのさまざまな病気因子から体をがっちりガード。更年期を迎えて突如、高血圧や生活習慣病などの症状が現

### Key Word

これからはどんどん減る一方…  
“女性ホルモン”って何者!?



性差医療を考える上で外せないのがエストロゲン（卵巣ホルモン）という女性ホルモン。エストロゲンは女性の体調を左右するもので、初潮から閉経までの間、骨密度や自律神経を安定させるほか、肌の潤いや髪をツヤツヤに保ってくれる働きも。ただ年齢とともに量が減っていくと、それまで隠れていた体の不調が出やすくなる。分泌量の多い30代でもホルモンはストレスの影響を受けやすいので、ためないように注意して。

#### オンナの病気 新常識

